
ポケモンダンジョン 武士道の救助隊

虚無夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンダンジョン 武士道の救助隊

【Nコード】

N8723Z

【作者名】

虚無夫

【あらすじ】

今思えば、私の人生は…いや第二の人生は少年から始まった。

違うな、明確に言えば少年では無い。少年が駆るMS『ガンダム』から始まったのだ。

そんな事を考えながら、私は少年へと通信を繋ぐ。

ほんの少し前まではどんなに熱く叫んでも届きはしなかった。

それは当時の私がガンダムと言う存在だけに固執していたからかもしれない。

しかし、今は違う。

私の思いは、叫びは少年の耳へと確実に届く。

「少年　　！」

我が愛機は既にELSに取りつかれ、浸食されていた。
金属生命体が機体を浸食するたびに、重い衝撃が襲い、私の体が悲鳴を上げる。

ただ、その程度でこの私は弱音は上げない。

血反吐を吐き、この骨が砕けようとも。

たとえこの空を二度と飛べなくなろうとも。

私は向かう、少年の元へ。

目の前の超大型ELSへと放った切り札が無効化され、どうするかと悩んでいる姫の元へ。

「未来への水先案内人は、このグラハム・エーカーが引き受けた！」

手元のスイッチを押すと、蒼の機体が深紅へと変貌する。

そのまま加速し、ほんの僅かに空いたELSの裂傷へと駆ける。

傷口はどんどんと閉まっていく、時間は無い。

そして、私には躊躇いも無い。

きっと、あの少年は私の屍を越えて、この世界を救い、手に入れるだろう。

説明ぶん

なあ、テメエ。救助隊やってみねえか？

ELSとの戦いで名誉の戦死を遂げたグラハム・エーカ が目を覚ましたらそこはポケモンの世界だった！？

これはポケモンの「ストライク」として生まれ変わったグラハムが、救助隊として活動していく感動の超スペクタクルな物語（

いったいグラハムはどのような物語を作っていくのか。

そして現れる新たな転生者達……！？

完全に作者好みのキャラ達が勢ぞろい！

提供は私、虚無夫がお送りいたします。

男、散る

今思えば、私の人生は…いや第二の人生は少年から始まった。

違うな、明確に言えば少年では無い。少年が駆るMS『ガンダム』から始まったのだ。

そんな事を考えながら、私は少年へと通信を繋ぐ。

ほんの少し前まではどんなに熱く叫んでも届きはしなかった。

それは当時の私がガンダムと言う存在だけに固執していたからかもしれない。

しかし、今は違う。

私の思いは、叫びは少年の耳へと確実に届く。

「少年　　！」

我が愛機は既にELSに取りつかれ、浸食されていた。

金属生命体が機体を浸食するたびに、重い衝撃が襲い、私の体が悲鳴を上げる。

ただ、その程度でこの私は弱音は上げない。

血反吐を吐き、この骨が砕けようとも。

たとえこの空を二度と飛べなくなろうとも。

私は向かう、少年の元へ。

目の前の超大型ELSへと放った切り札が無効化され、どうするかと悩んでいる姫の元へ。

第一の人生は空を自由に飛び回り

第二の人生はガンダムを愛し、そしてガンダムにより変革を迎え、
そして壮絶な死を遂げた。

だが、彼の人生はそこで終わらなかった。

そう、彼の三度目の人生が今、始まったのである

男、散る（後書き）

劇場版のあの場面ですね。

中々格好良く書けませんねえ…

瞳開ければ

ここは、どこだ。

風が身体を通り抜ける。私が一度だけ止まった事のある人革連のホテルのベットと同じぐらい気持ちの良い。

ああ、このまま再び意識を闇の底へと落とそうか。そうだな、それも良い。

どうせ私は死んだ身だ。何も考える必要はない。ゆつくりと、ゆつくりと体を休めよう。

そう、ゆつくりと………ん？

私は今何と言った、死んだと言ったのか。

なんとも可笑しな事だ。この私が死んだとは！

そこまで考えて、私はふつと鼻を鳴らして笑って見せた。

死んだ。あの瞬間、私は確かに死んだのだ。

忘れるわけがなからう、あの壮大な死に方を。私の最後を飾るのに相応しい死に方だった。

油断などはしていなかったが、あの状況では仕方がなかったと言えよう。いくら私の腕が高くてもだ。

E.L.S. 高知能金属生命体に取りつかれ、徐々に浸食される我が機体。

どうせ死ぬならこの武士道を突き通そう、最後に綺麗な花火を上げて。

最後に聞こえた少年の声は、今でもこの耳に残っている。透き通るような美しい声であった。

私は少年の為に、人類の為に、未来の為に死んだのだ。悔いなど残してはいない。

寧ろ清々しいぐらいだ。全てを脱ぎ捨て世界を駆け抜けるような開放感がこの胸を駆け巡っている。

ここは多分天国と呼ばれるような場所なのだろう、私なら地獄へ行くと思っていたがこの心地よさは地獄では無いのだろうな。

吹き抜けるそよ風、降り注ぐ日光、そして私を抱く遥かなる母。だいち

…天国にも地があるのか、少し意外ではある。

「…きて……、お……て……」

声が聞こえたような気がした、だがきつと気のせいだろう。

死後の世界とは孤独の世界。確かにそこに世界はあるだろうが、私以外の人物は存在しない。

孤立無援…戦争はしないが、そう言えばしっくりくるだろう。

「起き……きろ……」

まだ聞こえるだと、私の耳はおかしくなってしまったか。

それとも昔の記憶が勝手にこの声を流しているとしても言うのか、だとしたら随分お茶目な私の脳だな。

「きろっつっ……がれ……」

だんだん声が大きくなっているような気がする。もしか本当に私以外にも誰かいると言うのか。

思い当たる人物としたら、A E Uのエースの彼か？あの不死身の称号を与えられた奇跡の男。

あのような軽い男でも結婚できた。だが、それが仇となって不死身ではなくなってしまったのか。

とりあえずは、この重い瞼を開けてみるとしよう。まだ少しこの心地よい闇を味わっていたあつたが致し方あるまい。

さて、一体誰がしようか。不死身の彼か。それともイエーガンか、ソルブレイヴス隊の仲間メンバーだったら大歓迎だ。

もしかしたら我が盟友、カタギリかもしれない。だが出来れば彼にはまだ来て欲しくは無いな。

あの泥酔女と別れてから女運も上がって大人の階段も上った。そんな幸せ絶頂なカタギリが死ぬというのはあつて欲しくない。

少しの期待と不安を膨らませながら、私はゆっくりと瞼を開け

「起きろっていつてんだろっが!!」

「ぐふっ!？」

私の意識は再び、深い闇の海へと沈んで行ったのである

「何もつ一眠りしようとしてやがんだデメエ!」

沈めなかった。私は目の前の長身の男に首を掴まれ大きく揺す振ら

れた。

最初の一撃といい、どうやら彼はかなり出来るらしい。
そんな事を細かく分析しながら、次第に慣れて来る視線の中で私は
男を見た。

「な、何！マスコットか何かか！？」

「意味分かんねえ事ばっか言ってるじゃねえよ！」

目の前の男の姿は私の予想を遥かに超えていた。
その男は

人間では無い、まるで鳥人のような姿だった。

瞳開ければ（後書き）

この始まり方なら分かりますよね、ポケダン青シリーズです。

…え？分からないですって？え？

赤い目をした鳥人

まさか死後の世界がこんなにもファンタジーだったとは。針の山や血の池を想像していただけに少々拍子抜けだ。

いや、まだ分かん。彼は天使か鬼、はたまた神か閻魔大王かもしれない。

そう考えると何だか目の前の男が雄々しく見えてきた。

「おい…おい！呆けてんじゃねえよ！」

二度も怒鳴られた、親父殿にも怒鳴られた事は無いというのに。私
の場合はただ単に孤児だったただけだが。

その代わり、上司や友、部下に恵まれていたがな。

過去を振り返るのはここまでとしよう、私は未来へ向かって突き進む主義だ。

そうして生きてきた、そしてこれからもそうする。

それが私の生き方だ、武士道を司る私の。

おっと、これではまた怒られてしまう。そろそろ返事の二つや三つ返さねば。

必要なのはこの男が誰なのかという事と、ここがどこなのか。
無駄を省き、迅速かつ丁寧な情報を聞きとる。プロフェッサーの教えだ。

「すまない、君のフォームに見とれていたものでな」

「は、ハア？俺にそつちの気はねえぞ？」

しまった、どうやらあらぬ誤解を生んでしまったらしい。コマンドー、第一印象は最悪だ、どうぞ。

言葉を間違えればこの男の事だ、戦闘になりかねん。そうだったら人間の私に勝ち目はないだろう。

あれよこれよと考えながら、私は再び口を開いた。

「怒らずに聞いてくれbirdman、私に敵対意思はない」

先ずは敵では無い事の証明、両手を上げて武器を持たない事のアピール。

だが今の私は寝ころんだままなので、はたから見れば滑稽な姿に見えただろう。

私は顔を少し赤らめながら咳払いをし、ゆっくりと起き上がった。

「俺はバードマンじゃねえ！どこの囚われのファイターだよ！」

随分とマニアックなネタを使う、この男出来るな。

別に名前として呼んだ訳ではないのだが語弊があったらしい。

「失礼した、君の名前を先に聞くべきだったかな」

威圧的な態度を取ってしまっただろうか。まだあの時の癖が抜けていないらしい。

過去は振り返らない男と言ったばかりなのだが、恥ずかしいな。

「人に名前を名乗る時はテメエから名乗れってママンに言われなかったのかよ」

まさかこの鳥人に常識があったとは。甘く見過ぎていたようだ。確かにその通り、今回は私のミスだ。頭を軽く下げ、非礼を詫びると再び顔を上げる。

「私は地球連邦軍所属少佐、ソルブレイヴス隊隊長グラハム・エーカーである！」

所属先まで答えたのはあえてだ。今はその肩書も意味が無いという事は分かっている。

だが、今でも私はソルブレイヴス隊の隊長であり、オーバーフラッグス隊の隊長でもある。

ここが死後の世界という事は、どこかにハワードとダリル、ソルブレイヴス隊の部下達もいるのだろうか。

もしそうなら、聞かせてやらねばなるまい。私の変革を、世界がどうなったかを、あの熱きガンダムとの死闘を。

その後久しぶりに一杯やろう、こうみえて私は酒に弱く酒癖が悪い事で有名だがそれも良い。

この世界でなら始末書も口うるさい上層部もない。つまりはワンマンアーミー…ではないな。

「ちきゅー？ブレイヴス？…まあいい、俺あバシャーモのレッドアイっつーもんだ」

やはり分からないか、しかし想定内だ。あえて名乗っておきたかっただけである。

それより気になるのは バシャーモ 羽軍鶏という種族のこの男、レッドアイだ。

確かにお似合いの名だ、軍鶏か。意味は分かっている、伊達にMr・ブシドーと呼ばれていた訳ではない。

赤い目をした鳥人（後書き）

はい、バシャーモのレッドアイ君の登場です。
このレッドアイ君、言わずもがオリキャラです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8723z/>

ポケモンダンジョン 武士道の救助隊

2011年12月29日13時50分発行